

体の科学的な健康認識を育てる保健学習の工夫

～ 第5学年 「けがの防止」を通して ～

那覇市立高良小学校養護教諭 具志堅 綾子

I テーマ設定理由

現代社会は、核家族化や少子化、さらには、家族間の交流の希薄さなど、家庭や地域の教育力の低下が叫ばれて久しく、児童を取り巻く環境は深刻である。

本来、家庭や地域における日常生活の中から、自己の健康観も健全に形成されていくものと考えられるが、十分に身につけていないと思われる現状があり、それだけに学校教育の場でも、これまで以上に健康教育の積極的な取り組みが必要とされている。

小学校学習指導要領「体育編」の指導目標においても、生涯にわたって健康で安全な生活を送るための基礎を培うためには、体への科学的思考と正しい判断のもとに意志決定を行うこととされ、児童の「生きる力」を育む視点を重視した保健学習の展開がより望まれている。

本校の保健室来室児童の現状をみたとき、外科的利用においては、傷口を洗うことや出血時に傷口を押さえること、鼻出血時に軽く圧迫するなど、正しい手当の仕方が分かっていない児童が多い。内科的利用においては、児童は、体の不調を訴えるのみで、その原因やそこに至った生活の仕方を振り返ることができない児童が大半を占める。

これらのことは、児童が、自分の体に起こったことを自分自身で解決しようとせず、一時的な対応を求める等、他者依存的な傾向にあることが分かる。これは児童が、体のしくみを通した手当の科学的な根拠についての知識や理解が十分でなく、体のしくみと生活との関わりについて考えることができていないからではないかと考えられる。

このような児童に対して、個々の生活体験をふまえながら体のしくみや働きについて科学的に知らせ、理解させることにより、自分の健康問題に気づき生活を見直していく態度や実践力を培うことが重要であり強く求められているのではないだろうか。

そこで、科学的な教材の工夫と活用を通して、体のしくみを具体的にイメージさせ、体の機能のすばらしさ、「体ってすごい」という驚きを自分の中に発見させたい。生活との関わりについても知らせることにより、それぞれかけがえのない命であることを学び合い、自他を大切にしようとする態度と実践力を高めたいと考え、本テーマを設定した。

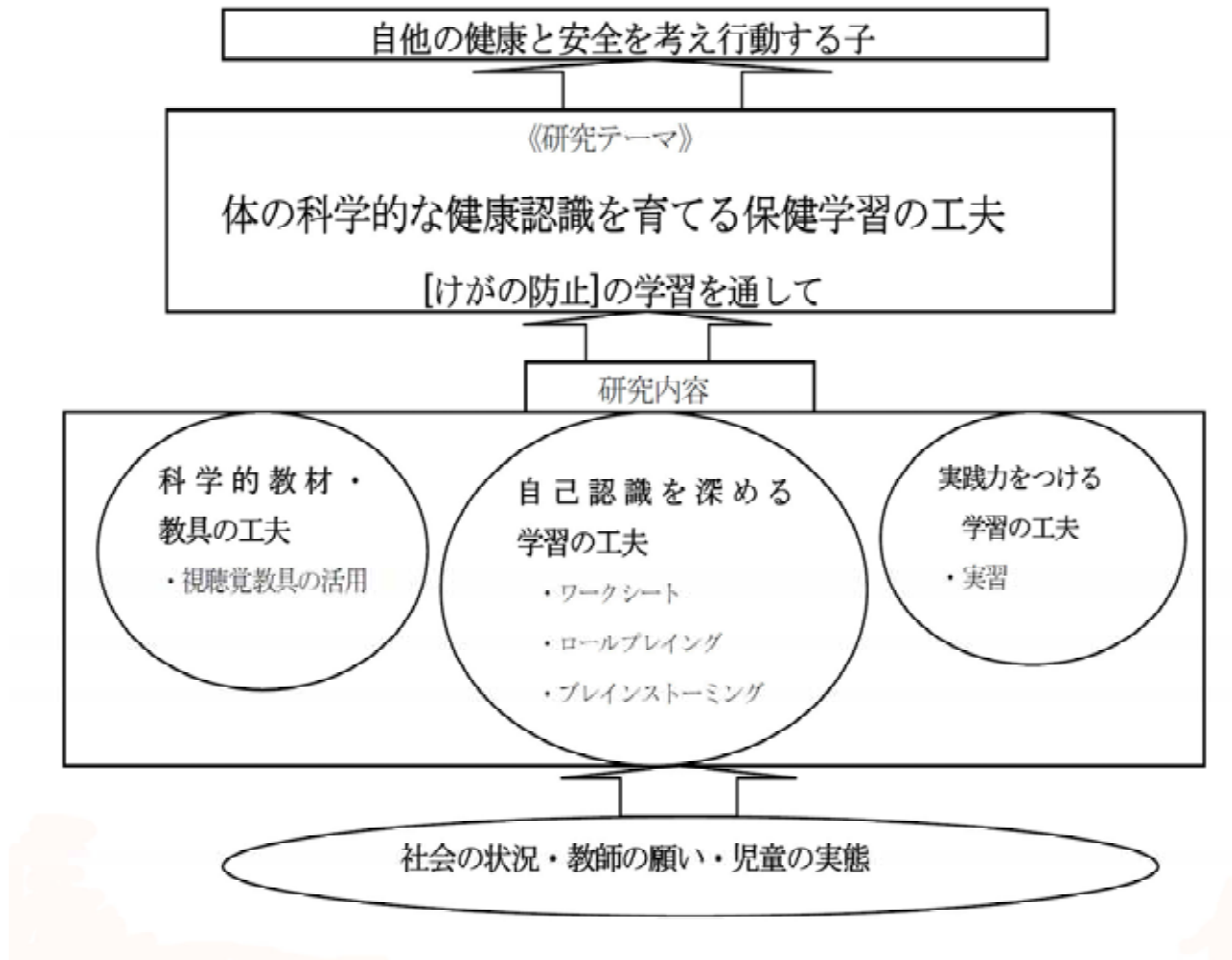
II 研究目標

体のしくみを理解することにより、自他を大切にすることとけがの防止に対する実践力を育てる工夫について研究する。

III 研究の方針

1. けがをした時の原因や処置の仕方について振り返る機会とし、安全な環境整備にも配慮することを気づかせる工夫をする。
2. けがの手当の実習を取り入れ、実践する力を身につける授業の工夫をする。
3. 体を守ろうとする人体のしくみを知り、規則正しい生活習慣を通して、活かされることに気づかせ、行動化につなげる工夫をする。

IV 研究構想図



V 研究内容と方法

1 体の科学的な知識について

児童は、けがをしたとき手当の段階がわからないということがある。彼等は、処置のみを求め、体の状況を医者まかせ、薬まかせ、親まかせで、自分の体の主人公になり得ていないと考えられる。このことは、自分自身の持つ自然治癒力、すなわち、体のもつ働きのすばらしさ・巧みさを生かし、健康を保持増進しようという態度が弱く、自分の体に起こった現象を「どうしてだろう」と意識していないことによると考える。

それらのことから児童に、体についての科学的な知識を持たせるということは、単に、体の様子を知ることではなく、体のしくみを通して生活や成長との関わりの意義を理解させ、生活を見直し、生涯の健康を確立するための基礎となる大切な条件であるということを知らせることと捉える。

児童は、体のしくみを科学的に知り、自分の体を意識し、客観的に認識することで、自分の中で営まれている生命のすばらしさが分かり、さらに、児童自身が体の機能を成長の過程で繰り返し実感することで、自分を大切にしようとする態度が形成され、自己の存在を高めることができるであろうと考える。

2 健康認識とは

健康認識とは、体を科学的に学び、自分の体のしくみや働きがわかり、体の快・不快が自覚できることである。さらに、自分の体を意識して、肯定的に健康生活を送ろうとすることで、体の調子や状態がわかり、自分の問題に気づき、改善の方策を考えることと捉える。

健康教育においては、単に知識を習得するだけでなく、自分自身が大切であるという内面に根ざした価値観を身につけ、知識を行動に生かす態度を育てることが必要である。また、健康認識の高まりとともに、自分だけでなく、他の人の健康にも気づかい、互いの考えを出し合いながら健康課題を解決することも大切である。

こうした健康教育の目標を達成するためには、健康課題に気づき、自ら課題を見つけ、健康に関する知識を理解し、主体的に考え、判断し、行動し、よりよく課題を解決する「生きる力」を身に付けることが大切である。

3 「けがの防止」でつけない力、育てたい力

小学校5年生の保健学習における「けがの防止」で育てたい力の目標は、下記の通りである。

- | |
|--|
| (1)症状を悪化させないための簡単な手当て(すり傷・きり傷・鼻出血・やけど等)ができる。 |
| (2)けがの発生要因や再発防止の方法について理解できる。 |
| (3)けがをした友だちの気持ちに共感し、いたわる等の援助や手助けができる。 |
| (4)危険な環境や行動に対して予知でき、回避できる。 |

また、発展的な学習としては、人間の体には、いつでも正常な状態に戻そうとする働きがあることを知らせ、そのしくみを生かす手当ができるようにさせたいと考える。

正常な状態に戻そうとする働きについては、中学校2年生の理科で取り扱う内容であるが、体のしくみを理解させながら、手当てを迅速に行うこと及び、けがの種類により方法が異なることの理解につながると考え本単元で取り上げた。小学校における体のしくみに特に関連が深いと思われる分野は表1の通りである。

表1 「保健室のまなざしからとらえた健康教育」国立大附属学校連盟養護教諭部会編より

小 学 校	理 科	6 年	A 生物とその環境 ウ 血液は、心臓の働きで体内を巡り、養分・酸素及び二酸化炭素を運んでいること。
	保 健	5 ・ 6 年	(3) 病気の予防について理解できるようにする。 ア 病気は、病原体・体の抵抗力・生活行動・環境がかかわりあって起こること。 イ 病原体が主な要因となって起こる病気の予防には、病原体を体に入れないことや病原体に対する体の抵抗力を高めることが必要であること。 ウ 生活習慣病など生活行動が主な要因になって起こる病気の予防には、栄養の偏りのない食事や口腔の衛生など、望ましい生活習慣を身に付けることが必要であること。

4 体の科学的認識を育てる指導の工夫

けがをした時の体の変化を体のしくみとして認識させることをねらいとし、授業実践を試みた。児童が自ら学び自ら考え、よりよく問題を解決し、より効果的な学習を行うためには、学習方法を工夫することが必要である。そこで簡単な実習（けがの手当等）の問題解決的な活動を取り入れ、児童に処置方法を習得させ、児童の活動意欲を高め、自主的・積極的な活動ができるように支援した。

(1) 視聴覚教材・教具の活用

現在、既成の教材は数多くあり、ビデオや掛け図、パソコン教材まで多種多様にそろっている。そこで既成の教材を使う場合には、内容が児童の発達段階に合致しているかを慎重に吟味する必要がある。教材を選定する際には、担任と養護教諭が内容を十分検討し、利用方法を工夫することが大切である。

一方、手作りの教材には既成の教材にない教師の「授業への思い」が込められている。養護教諭の専門性と自作資料の有効性を考え、自作してみた。実践に用いた自作資料は以下の通りである。

表2 手作り教材一覧

内 容	種類	視点（気づかせたいこと）
休み時間の様子 (1/4) ビデオ教材	自作	廊下を歩く時のマナーや清掃時に用具を正しく使用しているか、運動場や遊具で遊ぶ時周囲に注意しているか。
危険箇所(1/4) パネル教材	自作	どんな場面でヒヤリとしたか、ハットしたかを拡大挿絵にて気付かせる。 けがを防ぐために気を付けることを思考する。
皮膚と血管 (3/4) パネル教材	自作	血管の変化や血液の働きの説明をし、かさぶたができ傷が治るしくみを体の科学的知識としてわかる。
校舎内と校区の標識 (4/4) パネル教材	自作	校内外での安全な行動について認識させる。
校区内安全マップ (4/4) パネル教材	自作	安全マップ（校区・地域）を拡大掲示することで安全についての認識を深める。。



第1時で利用する休み時間の様子のビデオ教材の画面例



校区の標識（交通安全）



校区の標識（地域の防災対策）

(2) 学習ワークシートの工夫

○ ワークシートの作成・活用

授業の評価として、ワークシートを毎時間作成し、授業のねらいに沿って、課題を設定することで、自分の考えや感想を記述させ、児童の理解や意識の変容を把握するようにした。さらに、作成にあたっては、単元目標やねらいに応じて、児童が記入しやすいよう心がけた。

次時の授業や児童の支援のあり方について活用し、4時間の保健学習を通じて、児童が自らの成長をふり返り、認識することで実践力につながると考える。また、授業後に家庭に持たせ、学習した内容や活動を保護者に伝えることで、学びが深まっていったのではないかと考える。

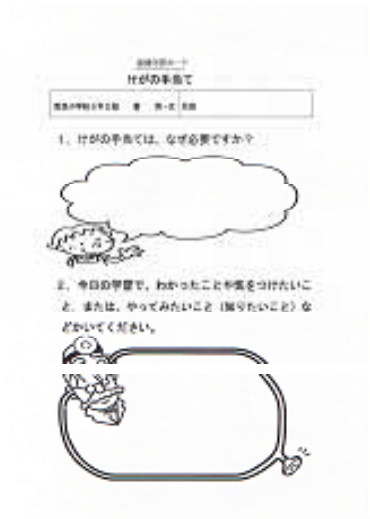


図1 ワークシートの例

(3) 実践力をつける学習形態の工夫

具体的には、ブレインストーミング、ロールプレイ等の技法を授業に取り入れ、健康課題についてどう取り組むかをとらえさせるようにした。

① ロールプレイング

けがの原因は、行動と環境が関係していることを実感イメージとして捉えさせるため、児童によるロールプレイを取り入れる。仲間の演技による同化と、演技者の感想から学習目標に迫ることにした。場を設定して実施することにより、他者の立場に立って考えたり感じたりすることができ、共感的な理解を図ることができると思う。

② ブレインストーミング（KJ法を用いて）

ブレインストーミングは、課題に対して思考を発散させる技法である。児童が、批判されることなく思いのまま意見を出し合う場の設定を創り出すことで、量が質を生み、他人の発言を肯定し、よりよいアイデアが生まれるのに有効な技法と考える。

③ 実習

実習は、グループ形態で行い、お互いのアイデアを出し合い、つぶやきが聞こえる中で協力しあい手当の工夫をすることをねらいとする。

本研究における実際の授業では、手当のポイントを掲示資料で説明し、各グループにけがの種類を割り当て、まずそのけがの手当の実習をさせた。けがの種類として「ひざのすり傷」「おでこのきり傷」「かるいやけど」「鼻出血」「足首のねんざ」「つき指」「目にゴミが入った」を取り上げた。実習中たえず教師は、机間巡視指導を行う。一つの課題（手当）が解決した喜びを持たせながら、さらに、グループでやってみたいけがの手当にうつる。まとめの段階で、教師が手当のポイントを示す。児童は体験したけがの手当の方法を、確かなものとし、自信を持たせることで、いろいろな手当の方法も興味を持つと思われる

さらに教師はけがの手当について、

「落ち着いて、けがの様子を見て、今必要なことを考える。」

「大きなけがである場合は必ず応援を頼み、大人へ知らせる。」

「声かけが大事である。」の3点について、児童に確認した。

グループで、協力し合う中から、けがをした人に対して優しく接する態度や丁寧な対応が必要であることも気づかせたい。

5 評価

小学校保健学習の評価の観点は、健康安全への「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」である。その観点について、本単元における評価の規準は、表3のとおりである。

表3 単元「けがの防止」

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
1 日常生活でのけがの防止について関心と課題意識を持つことができる	1 簡単なけがの手当の意義や方法について知っている。 2 具体的な防止策をあげることができる。	1 けがの原因は、行動や環境が関わって起こり、行動には、体の調子や心の状態が関係していることがわかる。 2 学校や地域の安全な環境づくりが必要であることを理解できる。

評価方法は、教師による観察や児童の記録したワークシート、アンケートなどを活用し、総合的に評価する。

また、児童の行動の変容を知る手立てとして、家庭との連携が不可欠である。そのため指導前に本学習のねらいや児童につけたい力を保護者に事前に知らせておくことと理解と協力が得やすい。

さらに、授業後に児童の学びを通信等で知らせることで、保護者も健康教育の一端を担っているという意識が付くと考えられる。

VI 授業実践

1 単元名 「けがの防止」

2 単元目標

- (1) 日常や学校生活で起こる事故は、行動の仕方とまわりの環境が原因で起こることを理解し、交通事故やその他の事故についても、防止するために、地域での工夫を知り、認識し行動できるようにする。
- (2) 簡単なけがの手当ができ、けがが治っていく自然治癒力という人体のしくみについて理解し、自他の健康と安全を考え行動できるようにする。

3 単元の指導計画

時	単元名	ねらい	学習内容	資料と活用
1 時	けがのや 原因故	○ 事故の防止について課題意識を持たせる。 ○ けがの原因をわからせる	○ ヒヤリ、ハットした場面を見てけがや事故の原因を考え、人の行動と環境が関わって起こることを理解する。 ○ ヒヤリ、ハットした役割演技をし、けがの防止を考える。	自作ビデオ フラッシュカード 拡大図(p2-5) 役割演技シミュレーション(図) ワークシート
2 時 (本 時)	体 の し く み を	○ からだのしくみ(自然治癒力)をわからせる。 ○ 人体のすばらしさの認識と自他の健康や安全を守ろうとする態度を育てる。	○ けがが治る働きがある。 ○ 血液の働きを理解する。 ○ 体には、元の状態に戻そうとする働きがあり、生活の仕方と関係があることを理解する。 ○ 自他共に、健康な生活を安心して送っていかうと考える。	掲示資料 血液の働き(図) ワークシート
3 時	け が の 手 当	○ 簡単なけがの手当がわかる。	○ 本校ではどんなけがが多いかグループで話し合う。 ○ 簡単なけがの手当てをグループで工夫する。	けがの手当のポイント説明 けが名のくじ 応急処置用具 ワークシート
4 時	安 全 な 行 動 環 境	○ 学校や地域が行っている危険を防ぐ工夫をわからせる。	○ 交通事故の原因を考える。 ○ 交通事故や災害を防ぐため標識や標示等工夫があることを知る。 ○ 一人ひとりが気をつけることで、みんなの安全につながり、命を大切にすることであることがわかる。	交通事故の新聞記事 校区マップ 学校内や校区内の標識等の写真 ビデオ(けがの防止/交通事故)

4 本時の学習

(1) 目標

- ① 人体には、体を守ろうとするしくみ(自然治癒力)があり、これは、生理活動を安定的に維持しようと働く生体の恒常性であることを認識させる。この誰もが持っている恒常性というすばらしい体のしくみを毎日の暮らしに生かし、安心して過ごせるように、自他の健康や安全を考え行動できるようにする。

(2) 本時における具体的な手立て

- ① 血液の役割を掲示資料で理解させる。
- ② 体を守ろうとするしくみをよりよく働かせるには、生活リズムや食事が関係してくることを知らせ、自分の生活を振り返る機会とする。

(3) 本時の展開

	学習活動・主な発問（○）	資料・準備	教師の支援
導入 5分	1 前時の学習を振り返る ○ なぜ、けがの手当が必要なのだろうか。 ○ 手当をしなくても治った経験がある，けがの手当の他にも何かあるのでは，なんだろうか。		・手当の必要性をおさえる。 ・本時の学習への動機づけとする。
展開 30分	2 けがを治そうとしている体のしくみ，血液の役割について理解する。 ○ けがをしたらどんなことがおこるのだろう。 3 血液の役割から自然に治るしくみについてわかる。 4 グループワークの説明を聞く。 ・グループワーク形態（机を静かに動かす） ・ワークシートの1～3について学習する（グループで教え合って記入する） 5 自然治癒力を高めるためには，どのように日々の生活をおくればよいか，ブレインストーミングの手法を用いて話し合う。 6 グループの代表が発表する。 7 自分の生活を振り返る機会とする。	・「血液の働き」についてのフラッシュカードを用いる。 ・4枚の皮膚の絵を用いる。 ・フラッシュカード「自然治癒力」 ・ワークシートを配る。 ・記入カード（グループに15枚・サインペン2本配布） ・記入カードを黒板に貼る。（マグネット）	・発問の工夫をする。すり傷を例にする。 ・児童が発話しやすいように支援する。 ・かさぶたの説明では，大切な血液を外に出さず，外部からの感染を防御していることをおさえる。 ・児童がワークシートに記入する時間を設定する。（3分） ・ブレインストーミングの方法を説明する。 ・カードに記入する時間を設定する。（7分） ・発表している間は，集中して聞かせる。
まとめ 10分	8 ワークシートに記入する。 9 本時のまとめをする。 ・わかったことや感想を発表させる。 10 次時の学習の予告をする。	・ワークシート	・ワークシート4～5を記入する時間を設定する。（5分） ・発表している間，集中して聞かせる。

(4) 評価

- ① 本時の学習に関心を持って参加している。（関心・意欲・態度）
- ② 「体のすばらしいしくみ」を知り，それを日常生活に活かすには，どう行動するのかについて考えている。（知識・理解）

VII 結果と考察

検証1

けがをした時の原因を振り返ることによって、原因の種類を理解し、安全な環境整備に配慮することができるであろう。

【結果】第1時に学校生活の休み時間の映像、第4時に校内・校区内の標識・安全マップで危険箇所を知らせるなど、地域や学校が工夫していることを視聴覚教材にて示した。

けがを防止する具体的な対策をあげることができたかを、児童の学習の様子と感想から検証する。

◎ けがの原因とけがを防ぐ方法についての理解

けがの原因は、「人の行動」と「環境」があり、行動には、「からだの調子」と「心の状態」に分けられる。「からだの調子」とは、睡眠不足・かぜ気味・熱がある等、ぼうっとしている症状があり、注意散漫である状態と捉える。「心の状態」とは、ふざけていた・ルールを守らなかった・慌てていた・怒っていた・廊下を走った等が含まれる。「環境」とは、道具等の未整理・施設や設備の破損や故障等である。

表4 けがの原因と防ぐ方法について 児童の意識調査結果から

質問	原因の分類	行 動		環 境
		からだの調子	心の状態	
問1 どんな原因でけがをしたか。		12%	77%	11%
問2 どんなことを気をつければけがが防げるか。		7%	87%	6%

ビデオ視聴後の児童の発表から

- ・給食当番を追い越して廊下を走っていたのでぶつかりそうだった。
- ・雑巾を振り回していたので、人の顔に当たりそうだった。
- ・運動場では、ブランコを漕いでいる人の前方を横ぎる人がいたのでぶつかりそうだった。
- ・サッカーをしている人が沢山いてゲームに夢中なのでぶつかりそうだった。

表5 具体的な行動策について（児童の感想より）

校内の安全に関すること	・ろうかでは、走らないで右側通行をすればけがを防止することができると思う。
家・地域での安全に関すること	・まわりを良く見て、気をつけながら行動する。
交通安全に関すること	・道を渡るとき右左を見る。 ・雨の日は、すべるので自転車は乗らないようにする。
安全な環境に関すること	・危険な場所とか先生に知らせて、修理してもらう。 ・散らかっている物を片づける。

【考察】表4では、「行動」の中でも「心の状態」が原因で起こるけがが多く、児童はけがが起こる原因を自らの行動を振り返り、具体的な行動策をとることで、けがは減少するであろうと考えられる。

けがの原因を理解させる手だてとして、自作のビデオで日常生活の場面を視聴させる。視聴後、児童の発表を通して、自分の行動を客観的に捉え、危険な場面を見つけ出し、自らも似たような危ない行動をしていることに気づき、自分自身を振り返ることができたと考えられる。これまで児童は、このことについて、漠然と分かっていたが、具体的な行動策の必要性に気づき、日常の中に多くの危険が潜んでいることを確認する機会になった。このことで、けがの発生原因を自分の行動と照らして考えることができたと思える。

第4時の授業では、生活の場である校区内の道路標識や施設の写真を掲示することにより、児童は、表5のような具体的な行動策をあげることができた。児童の感想から、交通安全に対する意識や、安全な環境について真剣に捉え、意識の変容がみられた。

検証2

けがの手当をグループで行い、相互に協力し合いながら手当のしかたを考え、課題を解決できたという喜びを持つことにより、実践力が身に付くであろう。

【結果】「すり傷・切り傷」「やけど」「鼻出血」「打撲」「ねんざ・つき指」をそれぞれ割り当て実習を行った結果、下記のような児童の感想が得られた。

授業後の感想から

- 工夫したのは、あせらないで手当したこと。
- けがの手当が自分でもできると分かってほっとした。
- おでこのけがは、出血を止めるため最初は、ハンカチでおさえた。
- すり傷などでは消毒液がなくても、きれいな水で洗えばいいということが分かった。
- けがの種類によって、手当に使う物が変わるんだなぁと思いました。鼻血の止め方がわかってうれしかった。
- 目にゴミが入っても水で洗って、こすらなければいいと分かりました。
- この授業をしてけがの手当のやり方が分かった。もしも、自分や人がけがをしたらけがの手当の授業のことを思い出して助けてあげたいです。

【考察】児童は、それぞれのグループで、けがの手当について一生懸命に取り組み、問題解決への積極的な活動を行っていた。さらに、机間指導の教師に「切り傷の時の出血や鼻血が止まらないときはどうしたらよいか」等質問したり、確認するすることで、けがの手当の仕方についてその意義や方法について理解できたと考える。

けがの手当の仕方の学習を通して、自分のけがだけでなく友だちのけがについても考えるという自他を大切にする意識が育った。この実習を通して児童は、学んだことを自らの行動につなげるための自信がついてきただろうと思える。

検証3

体を守ろうとする人体のしくみは、規則正しい生活習慣を通して、活かされることに気づくことにより、具体的な行動について考えることができるであろう。

【結果】各グループで、ブレインストーミングの手法を用いた話し合い活動を取り入れ、児童は、体のしくみを活かすために、日常生活を振り返り、思考し、どう行動化していくかにつ

いて、活発に話し合っていた。そこで、話し合われたことをカードに記入し、発表した。

授業後の児童の感想より

- 白血球は、寝ているときにふえるので
早ね早起きは、自然治癒力に必要とわかった。
- 運動をいっぱいしたら血液が栄養を全身に運ぶので、自然治癒力がいつでも
かつやくできることがわかった。
- 自然治癒力を強くするために、バランスの
良い食事をする。
- 赤・黄・緑の野菜を食べる。
- ミネラルをとる。
- カルシウム・ビタミン等の骨や体に良
い食事をする。
- 病気にならないように家を清潔にする。
- 体を清潔にする。

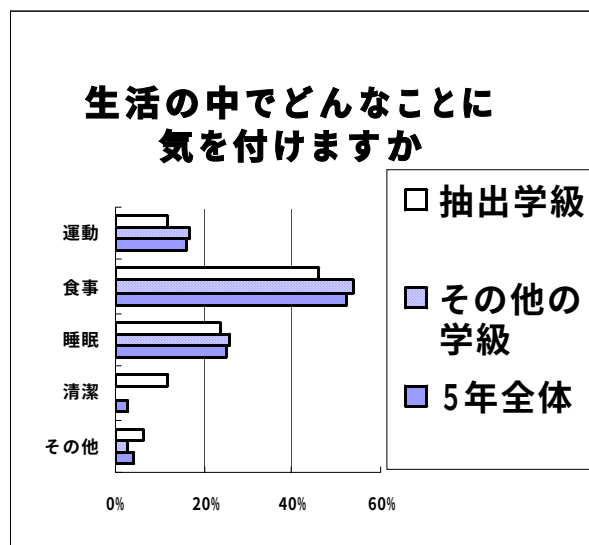


図2 日常生活の意識調査（授業後7月）
（抽出学級とその他の学級との比較）

（メモ日記の中から）

自然治癒力

今日、保健の時間「自然治癒力」について勉強しました。

まず始めに、血えきについてです。血えきは白血球、赤血球、血小板でできていて、白血球は、病気とたたかう医者さんで、赤血球は栄養を運び、血小板はからだの中の大工さんだそうです。

次に、自然治癒力を高めるにはどうしたらよいか、みんなで話し合いました。

「人間ってすごいな。」と思いました。

【考察】体のしくみをすり傷の治り方を例にして、赤血球・白血球・血小板の働きと、かさぶたへと変化する図を用いて説明したことにより、今までは、治っていく現象を意識することなく過ごしてきたが、実は自分自身の体が治していたということが具体的にわかった。体の科学的な働きについて「はじめて、こんなすばらしい働きがあること（自然治癒力）を知った」「人間ってすごいな。」等の感想があった。これらのことから、体のしくみの巧みさに関心が高まり、体に起こることを自分のこととして捉え、自己の認識が深まり、健康な生活を意識する意欲と態度が培われたのではないかと考えられる。

さらに、ブレインストーミングの多くのアイデアや意見から、毎日の規則正しい生活が健康な体をつくり、自然治癒力を高めることがあげられた。また、成長期の自分たちにとって、日々の食事や生活リズムが体と深く関わっているという体のしくみを知り、血液の重要な働きについても理解ができたと思えられる。

図2のアンケート結果から、全体では、食事に関することが半数を占めているが、授業を終えた抽出学級では、清潔にする・薬に頼らないなどが含まれ、健康な生活について考える意識が育ったと捉えることができる。



ブレインストーミングの結果を発表する児童

VIII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) けがの原因をふり返えることで、安全への意識を高めることができた。
- (2) けがの手当の実習を通して、簡単な手当の方法について認識させることができた。
- (3) 体を守ろうとする人体のしくみをよりよく活かすことを理解させ、具体的な行動について考えることができた。

2 今後の課題

- (1) 血液の流れや血小板の動きが分る教具の作成。
- (2) 養護教諭の専門性を活かした各学年の保健年間計画の作成。
- (3) 保健だより等による家庭との連携。

《主な参考文献及び引用文献》

小学校「授業書」方式による保健の授業	保健教材研究会・編	大修館書店	2002
養護教諭の授業づくり	松本敬子・著者代表	東山書房	2002
保健室のまなざしからとらえた健康教育	全附連 養護教諭部会・編	東山書房	2004
健康教室	第653集	東山書房	2005